

善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。しかるを、世のひとつねにいわく、悪人なお往生す、いかにいわんや善人をや。この条、一旦そのいわれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆえは、自力作善のひとは、ひとえに他力をたのむところかけたるあいだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のころをひるがえして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いずれの行にても、生死をはなるることあるべからざるをあわれみたまいて、願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もっとも往生の正因なり。よって善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おおせそうらいき。

北第3組 即信寺住職

亀谷 亨

text by Susumu Kamegai

### 第三章 「願をおこしたもう本意」

『歎異抄』は、教団外の人々を対象にしたものではなく、本願に出会いながら自力の執心によって混乱をきたしている「同心行者の不審を散ぜんがため」に書かれた書物です。ですから、本章における善人・悪人ということも、基本的には念仏の行者における自力執心の問題性を明らかにしようとして掲げられた問いなのだと思います。

「善人なおもて往生をとぐ」と説かれるように、善人も往生するのです。しかし、それは「疑城胎宮・辺地懈慢」を内容とする方便化土の往生だと言われています。対して悪人の往生は「真実報土の往生をとぐる」ということですから、二つの往生は同質ではありません。しかし、それは聞いている念仏の教えに違いがあるのではなく、聞く側における機の別ということから起こってくることなのです。そこに、同じ教えを聞きながら、受け止めが変わってしまうという問題を自らの中に発見し、課題とされたのが宗祖です。

周知のように、法然上人は往生の根拠を第十八願「念仏往生の願」に見出されたのですが、宗祖はさらに念仏往生の背景として第十七願「諸仏称名の願」を見出し、念仏往生の課題として第二十願「至心回向の願」を見出されました。宗祖のこの視点と、「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」という言葉で押さえられている課題は同一のものでした。

『大経・第十八願成就文』には「あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向したまえり」と説かれています。「その名号」とは、第十七願の諸仏称名のことです。つまり諸仏が讃嘆する名号を、私たちが称名讃嘆できることにおいて信心と歓喜が生ずるのです。宗祖はその体験の事実を「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」と表現されました。

しかし、善人意識に執られるとき、私たちはその名号を私有化し、自らの手柄に取り込んでいきます。教えられて念仏申す身となったことを忘れて「自分の努力によってここまで到り着いた」と得意になり自らの世界に閉じこもる、それが第二十願にて指摘される「疑城胎宮・辺地懈慢」というあり方です。

宗祖が第十七願と第二十願の重要性を説かれたのは、法然教学の不備を補ったということではありません。「本願の嘉号をもって己が善根とする」根深い自身の善人性の発見において二願との出遇いがなされたのであり、それこそが宗祖における悪人の自覚なのでしょう。その領きにおいて宗祖はまさに、如来が「願をおこしたもう本意」を聞き得たのです。

今回のご遠忌にて「念仏の声が聞こえない、七百回忌には御影堂に念仏が響いていた」と歎く声が聞かれました。しかし、その念仏は如来の呼び声であり、諸仏称名であるということを見失ったままでは、たとえ念仏の声が響き渡ったとしても「悪人成仏のため」に第十八願を発こされた如来の大悲心に出遇うことはできないのでしょ

池田勇諦先生は「称名の主語はどこまでも諸仏。仏を称讃できるものは仏しかない。にもかかわらず、私たちは無意識裡に自分自身を称名することのできる存在だと思いこんでいる。諸仏称名を衆生称名に持ち替えているのではないか」（講義趣意）と言われます。

諸仏称名とは、単に諸仏が阿弥陀を褒めたたえるのを聞くということではありません。阿弥陀の名を聞くということは自身の罪障性を聞くことであり、その事実を自らの生き様をもって教えてくれた人を諸仏と敬うことです。諸仏を敬うとは弥陀の誓願に遇えたということです。自分に関わる一切の出来事が如来の誓願を聞く縁となることができたとき、私たちは念仏に育てられる身と定まるのです。